

2006年6月30日

## 陳 述 書

マルタン アニエス

- 1 私は一つの夢を抱いて、6年前に初めて来日しました。現在は、通訳になるための勉強をしながら、クラス・ド・フランセというフランス語学校で、翻訳や受付などの仕事をしています。
- 2 日本のことをまだ知らなかった小学生の時から、私は通訳になりたいと決心していました。小学校では英語を、中学校ではスペイン語を学校で学び、その中で様々な外国語に興味を持つようになりました。私は、フランス東部のリヨン市の南に住んでいましたが、高校に進学するとき、英語やスペイン語などヨーロッパでよく使われるもの以外の言葉が学びたいと考えました。そこで、自宅からは片道3時間かかる高校で、日本語が学べるということがわかり、そこへの進学を決めたのです。週末をのぞいては、高校の寮で生活しました。ここで私が初めて出会った日本語は、選択科目の第3外国語でしたが、必修の第1外国語、第2外国語の英語・スペイン語より、力を込めて勉強をしたのです。ひらがな、カタカナ、漢字など、夢中で覚えました。
- 3 バカロレアをとってから、1年間、日本の四日市市の高校に留学しました。ホームステイをして、学校でも家庭でも、全て日本語漬けの生活をしたことで、私の日本語は、早く上達することができたと思います。  
そして、フランスに帰国して、グランゼコールの一つであるパリ国立東洋語東洋文化学院に入学しました。ここはラテン語系以外のさまざまな言語の、フランスでの最高の教育機関と言ってよいと思います。ここで厳しい日本語教育を受けながら、時々日本に戻って学び、4年生の時には、日本政府の給費留学生として、東京外国語大学に入りました。
- 4 その後、ずっと日本で学び続けており、国際会議通訳を目指して、現在も通訳学校に通っています。日本語・フランス語の同時通訳は、日本人はいるのですが、フランス人はほとんどいません。国連などでは、必ず、「外国語から母語への通訳」をすることが原則なのですが、フランス語の場合、日本語からフランス語に通訳できる「フランス語を母語とする人」が、ほとんどいないのです。私は、その通訳をめざしています。
- 5 今からちょうど一年前に、偶然、クラス・ド・フランセを知り、校長のマリック・ベルカヌと出会いました。ご存じの通りこの裁判が始まったときでもあり、マリック校長の戦いに強い関心を持ちました。フランス人として、フランス語講師として、そして通訳の卵として、石原都知事の発言を許せませんでした。
- 6 実は数字というのは、多くの通訳者を共通して悩ませているものです。  
現在通っている通訳学校では、私は創立以来初めてのフランス人受講生で、クラスメイト全員が日本人です。先生はプロとして高い評価を受けている現役の通訳者で、一人はフランス人、残り4人は日本人です。  
クラスでは、よく数字を中心に経済ニュースを訳す練習があります。そこで気付いたのですが、日本人が70、80、90などをフランス語で言う時には一切不便、不自由を感じさせられません。ネイティブではない先生はもちろん、クラスメイトにも同じ印象を受けています。ところが、日本語の「万」「億」「兆」の単位の数字になると、それをフランス語に訳す場合も、逆に日本語に訳す場合も、クラス全員が、大変苦勞をするのです。つまり、日本人にとっても、フランス人にとっても、この単位の意味を、瞬間的に理解することが難しいのです。これを身につけるために、経済ニュースを訳す、練習があるのでした。  
このことは、この裁判の内容を知って、私自身日本語の数え方の難しさをあらためて考え、気がついた事です。  
このように、数え方の難しさというのは、言葉というものが全て、その個性として持っているもので、すぐれているとか、おとっていると比較できるようなものではないと、いくつかの言葉を学んでいる立場から、実感しています。

7 「フランス語が国際語として失格している」という発言が持つ意味を、通訳者の視点から、考えてみましょう。石原都知事の言う「国際語」とは、「国際的に広く使われる共通語」という意味だと思われませんが、国際的なやり取りが全て、たとえば英語など広く使われている言葉だけでなされるようになったら、どんな事がおきるかということです。

重要な話を、それぞれが母語ではない言葉で話し合った場合、母語に比べて、表現が限られたり、かんちがいが増えたり、自分の英語力が低いと見せないために理解している振りをしたりというような混乱が出てくる可能性があるのです。それは、コミュニケーションの質の低下を意味します。

通訳という職業は文明の起原と同時に現れ、母語のレベルでの意思疎通を実現すると共に、結果として、それぞれの言語の豊かさを守る大事な役割をになってきました。共通語を使うコミュニケーションに片寄ることは、それぞれの原語をじわじわと貧しくするに違いないと思います。

8 我々が生きているこの地球上には、話されている言葉が山ほどあります。それぞれの言葉に特徴、弱点、面白さがあります。言葉が共存しているのは素晴らしいことであり、自分の言葉の方がその言葉より良いと考える時点で、言葉だけでなく、その言葉が話されている国々の文化、歴史、国民まで否定することになると思います。このような考え方は世界人として、失格なのではないでしょうか。

このように、私を含め、世界中でたくさんの方が努力を重ねている通訳という仕事に対し、また私の母語であり、職業としても使っていくフランス語に対し、石原都知事は、大きな侮辱をされました。ぜひ誤った発言の撤回と謝罪をしていただきたいと思います。

私はこれからも、小学生の頃からの国際会議通訳への夢に向かって、この日本で学び続けていきたいと思っています。

以上